さくらいのひと、みっけ！

囲碁で全国大会に出場
一手一手の先に見据えるのはプロへの道



村井（むらい） 莉緒（りお） さん

小学３年生の村井莉緒さんは、６月に開催された第 47 回文部科学大臣杯少年少女囲碁大会奈良県大会で、上級生を抑え準優勝。７月に日本棋院東京本院で行われた全国大会にも出場し、リーグ戦で２勝をあげる活躍を見せました。

幼いころから、囲碁を打つ父親の姿を見て育った村井さん。５歳のころには「黒と白の石で何してるの？」と興味を持ち、自然とルールや考え方を学んでいきました。現在は週に３～４回、父親との対局や対局後の振り返り（感想戦）に励むとともに、週末には囲碁教室に通い、他の生徒と切磋琢磨しながら技術を高めています。囲碁の面白さを「何度対局しても、同じ形にならないところ」と話し、盤上を広く見ながら数手先まで考え、思い通りに打ち進められたときに、楽しさを感じるといいます。

全国大会では、実力を発揮できた対局もあった一方、一手のミスが響いて敗北を喫した悔しい対局もありました。気持ちを切り替えて望んだ最後の対局では「よく覚えていない」というほどの集中力で強豪に勝利し、周囲を驚かせました。

これからの目標を「次の全国大会にも出場し、８位以内に入る。将来はプロになりたい」と話す村井さん。一手一手に思いを込めて、挑戦はこれからも続きます。

発掘調査現場から（320）

弥生時代の
大きな溝（環濠（かんごう））を確認
～大福遺跡第 40 次調査～

第 40 次調査は、桜井市と橿原市に広がる坪井・大福遺跡から大福遺跡にかけての範囲で行いました。この地域は、田原本町の唐古・鍵遺跡と肩を並べる、奈良県を代表する弥生時代の拠点集落として注目されてきました。

調査では、弥生時代中～後期・古墳時代前期・飛鳥時代～中世の遺構が確認できました。特に弥生時代の遺構には、土坑・柱穴・溝に加え、弥生時代中期の環濠集落の一部と考えられる大きな溝（環濠）を３条確認するなどの成果がありました。この溝は集落南辺にある溝の延長である可能性が高く、南北方向の溝であることから、坪井・大福遺跡の集落の東端を示していると考えられます。弥生時代の集落に一番近い環濠は、幅 2.1 m・深さ 1.7 mの大きさで、底に向かって鋭く尖る「Ｖ字状」に掘られていました。

今回の調査では、弥生時代の集落の姿を復元する上で貴重なデータが得られました。さらに、弥生時代中～後期の遺構や遺物が大量に出土し、この地域がたどった長い歴史の移り変わりを明らかにする、重要な成果となりました。



Ｖ字に掘られた環濠（北側から撮影）▶